

## 関連事項

### ① 平福百穂の教授就任

昭和七年一月二十日、平福百穂が教授に就任し、前年死去した小堀軻音の後任として日本画科の指導に当たることになった。これは結城素明の推薦によると言われる（小高根太郎著『平福百穂』昭和二十五年、東京堂）。

百穂は本名貞蔵。明治十年十二月二十八日秋田県角館町に平福穂庵の子として生まれ、同二十七年より川端玉章に師事し、同三十二年に本校日本画撰科を卒業した。翌三十三年には結城素明らと无声会を結成して日本画における自然主義運動を始め、同三十五年には西洋画撰科に再入学して一年間デッサンを学び、また、『新声』、『平民新聞』その他の挿絵に健筆を揮った。大正十一年以降は帝展審査委員をつとめ、昭和五年に帝国美術院会員となった。晩年になるに連れて琳派や大和絵、南画など、古来の日本画の画風をとり入れ、事物の内面性を描出しようとする傾向を強め、昭和六年の「刈草」、同八年の「春の山」に見られるような清々しい趣をたたえた作風に到達した。正木直彦は

その爲人は常に余の推服して措かざりし所であつて、洵に圓滿玲瓏、接する者をして自然に和怡の感を抱かしむるものがあつた。

『温如玉』といふ語があるが、その人格から云つても、將その風采から見ても、之程適切に平福君を表現するものは他にあるまいと思はれる。しかも藝術家として最も尊ぶべきは、その性行の裡

に一片の市氣、匠氣、銜氣をも留めなかつたことで、これがその作品に現れてかの高潔なる畫品をなしてゐたことは人の能く知る所である。

〔平福君の憶出〕『アララギ特輯、平福百穂の念出』昭和九年三月

と記しているが、教授に招聘した理由も恐らくこの辺にあつたと考えられる。ただし、待遇の悪さを次のように指摘するものもあつた。

平福畫伯が教壇に

けふから美校教授

平福百穂畫伯は二十一日付で東京美術學校教授に任ぜられた、畫伯が教育壇上へ乗り出して子弟の教育指導に力を注ぐことは美術界から大いに期待をかけられている

直轄學校といつてもさすがに特殊な學校だけにその官等、俸給も圖抜けて低く高等官四等十級で、判任官二級の月給百二十五圓にも足りない貧弱さなのは日本畫壇の耆宿もお氣の毒

（昭和七年一月二十二日『読売新聞』）

百穂はアララギ派の歌人としても著名で、また、『日本洋画曙光』（昭和五年、岩波書店）の著述もある。本校教授となつたのは最晩年のことで、既にその頃から病気の兆候が現われ始め、惜しいことに一年後の昭和八年十月三十日には死去してしまつた。